

地方にてディベートの普及に取り組む

～東北ディベートネットワークの歩みより～

東北ディベートネットワーク 名越幸生

0. はじめに～この文章を読んで欲しい理由～

私たちは、ディベート人口も少なく、指導者も足りているとは言えない東北という“地方”で、ディベートの普及に取り組んできました。

これらの実践が、未だディベートが普及していない地域にどのようなアプローチが必要なのかを考えるきっかけになれば幸いです。

同時に、既にディベート人口が盛んな都市部の方々には、地方でのディベート普及に目を向けて頂き、可能な範囲での協力をお願いします。

とにかく、一歩でも、より良い形でのディベートを、地方の隅々にまで普及させたいのです。

1. TDNの結成のいきさつ及び必要性

東北地区の代表校が、中高とも、全国大会で勝てない、というのが最初のいきさつです。

…いや実は、予選リーグを勝ち上がったチームもあり、また後述するように、会津若松第二中学校が2年連続で決勝に進出するなど、「東北の学校は勝てない」は必ずしも正しくはありません。

しかし、ある他地区の生徒が、予選リーグに東北地区の代表校が入っているのを知り、「一勝は堅いな」と呟いているのを、当の東北代表校の生徒が聞いてしまったのです。その、怒りと嘆きの混じった訴えを、私は神田外語大学の屋外で、複雑な印象と悔しさをもって受け止めました。「ディベートが上手になりたい」という気持ちを何年も抱き続けていられるのは、その時の訴えを受け止めた自分を、今でも忘れていない、という1点がブレていないことが、理由の一つです。

また「自分たち1校だけでの取り組みでは、不利だ」ということも、実感していました。最初の原因論だった年に東北代表校だった本校は、肯定側立論に、当時まだ認知度の低かった燃料電池の分散型発電を盛り込んでいました。初日の対戦を肯定側で勝てた本校は、次の否定側で負けて、2日目に臨むのですが、その肯定側立論に特化した対策が練られた議論に、負けました。その対戦相手が、初日の本校のフローシートを入手していると、ふとしたきっかけで知りました。同じ地区

内で情報を融通し合うことは、1校だけでは無理だ、と思いました（多くの部員を動員したり、OBの力を借りたり、というプランが考えられないほど、まだディベーターが少なかった時代です）。

この「1校だけでは現状を打破できないのではないか」という思いを、その年共に代表校を引率していた秋田県立能代高等学校の田口先生(当時)も抱いていました。当時の宿泊先として斡旋されていた幕張プリンスホテルの一室で、「連携しなければダメだ!」と意気投合しました。「ディベートが上手になるための活動を始めよう」、「そのためには、連絡用のメーリングリストを設置しよう」と、本校のサーバにTDN(東北ディベートネットワーク)というメーリングリストを設置したのが、2002年の1月です。

2. 結果として「連携」というプロセスが大切!

丁度10年が経った今、これらの考え方には幾つかの誤りがあったと思っています。簡単な結論は「連携しなければ全国大会では勝てない」とは言い切れないということです。しかしながら「連携」は、様々な良い教育効果をもたらします。

そもそもディベートは、肯定側と否定側とジャッジが集まらなければ、ディベートが成立しません。ですから、3者の日程を合わせて、集うことが必要です。これが大都市圏など、ディベーターが比較的狭いエリアに多くいるのなら、集まりやすいと思いますが、東北は各県に1校ずつと、どこに集まるにも時間とお金がかかります。生徒の負担は小さくはありません。それを乗り越えていかに集うか、という課題に、私たちは向きあって、互いに「連携」することで解決してきました。

また、「3人寄れば文殊の知恵」を更に上回る「3校寄れば文殊の知恵」となり、1校だけでは獲得できない「視野の広さ」を、「連携」から獲得することができます。

加えて、NADEの東北支部とTDNとは、多くのメンバーが重複していても、別組織だという利点がありました。「ディベート」という旗のもと、英語ディベート出身の方など、必ずしも教

室ディベートに関わっていない方々とも広く連携できる「ディベートの裾野を広げるための『草の根活動』を展開する組織」として、比較的自由に活動を続けてきました（このような話を、支部長の江間先生と重ねて、ここまで来ております）。

以下、TDNが実施している企画について説明します。

3. 東北ディベート交流大会

毎年5月のゴールデンウィークに盛岡で行われます。ディベート甲子園東北地区予選が毎年仙台と、南東北で開催されるので、北東北の盛岡で開催していますが、当初は仙台での開催でした。

今でこそ、純粋な大会形式になりましたが、当初はディベートの練習方法をレクチャーする時間などを設けていました。ですが、今はディベートのスキル向上の方法も、参加者自身が知っていて、試合をしてジャッジからのフィードバックがあれば自ずとそれぞれが向上するようになり、時間の制限もあって、そのような企画はなくなりました。

ただ、交流大会に関連して、「今は無き企画」を1つ、「現在ある企画」を2つ紹介します。

3-a:教員チームの結成

何せ当時は、本校（＝東北学院高校。なお当時は、東北学院中学校の部員がゼロ）と能代高校の2校でTDNを構成していたので、大会になりません。そこで、OB・OGチームと、引率者で教員チームを用意して4チームにして、大会を成立させていました（引率者以外でジャッジが足りていたのが幸いでした）。更には関東より、スペシャルチームを招いて、高いスキルのディベートを直接感じる、という企画もありました。

今思うと、現在の東北支部を支えてくださっている先生方の中には、能代高校の佐藤亜希子先生や大館国際情報学院の佐藤英徳先生など、当時の教員チームと一緒にディベートをしてくださった先生方がいらっしゃいます。試合を体験することで、生徒を指導する際のポイントが掴めるだろうという考えもありましたが、それよりも、準備時間の相談や、選手ならではの“頭の回転具合”が心地よく、「ディベートは楽しい」と思えました。やはりディベートの楽しさを伝えられる状態であることが、指導者の側には必要だと思います。現在はディベーターの増加に伴って試合数が増え、引率者もジャッジをしなければならないのですが、今一度指導者のスキルを高めるために、教

員が生徒に混じって試合をするのも良いのではないかと考えています。

3-b:春の初心者講座

せっかく5月に遠征をするなら、新入部員も一緒に、という一石二鳥を狙った企画です。当初は新入部員にも試合に参加してもらっていたのですが、本校の生徒より「あの時は訳もわからず与えられた原稿を読んでいただけだった」という感想を聞いてから、初心者講座に切り替えました。ディベートについての誤解を解き、フローを取るコツを伝え、シナリオディベートで練習をしたら、その日の最終試合を見学させます。そして次の日までに、ディベートのシナリオや先輩の立論・反駁を参考に、自分たちの議論を考えさせる宿題を出して、2日目に練習試合を1試合、最後は決勝の見学、という流れです。これにより、各校に戻っても先輩たちが何に努力をしているのかが理解でき、一緒に部活動ができる、という流れを形成できます。これにより、3年間ディベートを続けてくれる高校生がたくさんいることから、一定の効果が認められると思っています。

3-c:試合後のアンケート

大会運営に関する内容よりも更に突っ込んで「地区大会にてより良い議論をするために、今回の論題に関する議論への疑問、ジャッジの方等に聞いてみたいこと」を書いてもらっています。それはすぐに集約され、6月にNADE東北支部主催で行われる「ディベート入門セミナー」の終了後、江間支部長とセミナーの講師と交えて、その質問への回答を作成し、参加者（＝参加校全校）に配布しています。議論に関するものにはヒントとなる回答を、ディベートの技術に関してはポイントとなることを伝えることで、7月までにより良い議論を準備してもらうように伝えています。

4. 東北ディベート交流研修会

他校と練習試合をすることなく（正確に言うと、遠征等ができる環境ではなかったのに）、全国優勝、準優勝と、2年連続でディベート甲子園の決勝に生徒を導いた、会津若松第二中学校の藤田信一先生（当時）に、指導方法について教を乞うために始めました。更には「折角お金と時間をかけて集まるのだから、練習試合をしよう」という企画にしました。ここで施した工夫が、思いがけない教育効果をもたらしています。

4-a:東北六県の持ち回り

第1回は会津若松第二中学校のある福島県で、

第2回は、その年の東北地区予選に初出場してくれた岩手県立黒沢尻北高等学校の合宿所で、第3回は移転をした本校及び合宿所で…と、3回実施した段階で、北東北と南東北を交互に、という流れが良い、ということになりました。その後、能代→天童→八戸→郡山と、順調に東北六県を持ち回りました。この「普及のために地方を巡る」姿勢も、TDNが2009年に『ディベート教育功労賞（パナソニック賞）』を受賞した理由の一つになっています。

この東北六県を持ちまわるきっかけは、私が、北海道の函館出身で、全道規模の企画へ参加するために、特急に乗って約4時間かけて札幌へ往復していたこと、その時の旅費が子どもながらに「結構高価だ…」という印象を持っていたことに由来します。その後大学へ進学して札幌に住んでみると、今度は札幌に“来てもらう”立場となりました。札幌に住んでいれば、今まで負担していた旅費を負担せずに、その企画の恩恵に預かれる“仕組み”に気付いた私は、何かを普及させるためには“こちらから出向く仕組み”が大事であると、過去の経験から知っていたのです。

実際には「研修会が近くで行われるから来ることにしました」という方も、隔年で1～2名おありまして、その効果はゼロではない、という印象です。また、当然のことながら、これも隔年ではありますが、研修会の会場が近い学校さんは、遠征の金銭的・時間的負担が減ります。

一極集中で格差が生じないようにすることも、大切な視点の一つだと思っています。

4-b: 東北地区【共通論題】の策定

「練習相手となる学校が少ないのだから、中学と高校とで論題を共通にして、対戦相手を増やせばいい」という単純な発想から生まれました。

この策定方法については紆余曲折があったのですが、現在では、

- ①: その年のディベート甲子園・高校の部の代表校から、取り組みたい論題を募集する（幾つでも構わない）
- ②: 全ての論題をリストにして、東北地区予選に参加した全ての中学校に送付し、中学生ディベーターに「? : 論題に関してよくわからない」「× : 個人的にはやりたくない」を投票してもらう。「?」は、中学生にとって予備知識が不足していて、議論に至るまでに時間がかかると判断し、「×」の2倍の点数をつける。結果として得点の高い論題

は“中学生から拒否されている論題”と判断し、論題候補から外す。

③: OB・OGの力を借りて、論題に複数のメリット・デメリットがあるか否かを再検討してもらい、また証拠資料の量等を確認してもらって、肯定・否定のバランスが崩れている論題は、論題候補から外す。

④: 3つを目処に残した論題を、TDN及び東北地区予選に参加した全ての中学・高校に再提示し、TDNのメンバーが1人1票、各校の部活で1票（部員の多い・少ないで差が開かないように）、1位・2位を投票してもらい、最終得票の多い論題を、ワーディングを再度確認して、東北地区【共通論題】に決定する。

(⑤: ②で外された論題は、NADEの論題検討委員会に、次年度ディベート甲子園の高校用論題として推薦、外されなかった論題は、中学用論題として推薦する)

こうすると、中学生と高校生が一緒に取り組んで、なおかつある程度バランスの良い論題が選ばれます。ただ2010年度の「消費税を10%にすべきである」のように、中学生にも身近ながら、いざ取り組んでみると難易度の高い論題が選ばれる場合もありますが、それも地区の経験のうちだと思っています。

4-c: “昨日の敵は今日の友”方式の練習試合

第1回の練習試合に参加した中高生が16人だったことから、1回戦は個人戦、2回戦はペア戦、準決勝は3人戦、決勝は4人戦となるトーナメント戦を考えました。

それはたまたま、東京ドームで見た都市対抗野球で、他のチームの選手が混じっているのを見て不思議に思ったのがきっかけでした。都市対抗野球には、補強選手という独特の制度があり、各地方予選で敗退したチームから、合計5名まで選手をレンタルできるのです。この制度ですと、自分の所属するチームが負けても、実力のある選手は全国大会に行けます。ディベートで言えば、「試合で勝ったけど、アイツは上手い」というディベーターを相手チームから引き抜き、自分のチームを強くするシステムとなります。RPGゲーム『ドラゴンクエスト』で、倒したモンスターが「仲間になりたいと言っています」というイメージとも重なり、やってみたのです。これが想定以上に教育効果があって、参加者のスキルを伸ばすことが分かりました。その原因は、

①初戦で同校対決を避けるために、各学校のディベーターをトーナメントの山ごとに分散させると、自動的に全ての学校が分散し、その結果として、他校同士のチームが形成されることとなる。

②準備の段階で相談したことのないディベーター同士が、欠点を補い合い、互いの長所を学び合っており、改めて議論を練り直す作業が、ディベート及び議論について捉え直すきっかけとなる。

の2つだと思っております。

4-d参考：山本君（北海道・北嶺高校）の参加

企画自体の工夫ではありませんが、特筆すべきエピソードがあります。

4-b で述べた【共通論題】を、北海道支部とも共通に策定していた時期があります。それは北海道の秋季大会でも採用されたのですが、その試合で負けた北嶺高校の山本君が、悔しさをバネに、2006年に能代で行われた交流研修会に参加（遠征）してくれました。私も“昨日の敵は今日の友”方式の練習試合で“サービスとしてわざと”、会津高校の深津君（2006年ディベート甲子園高校の部ベストディベーター）と対戦し、その後と同じチームになるようなシードにしました。案の定、ただ対戦するだけではわからない、ディベーター同士の交流があったようです。そこでのノウハウを北海道で展開してくれた山本君は、2011年に北大ディベートクラブとして、ディベート教育功労賞（パナソニック賞）を受賞するのです。

5. 代表校合宿

地区予選を勝ち抜いた学校が集い、今一度議論の練り直しと、ディベートのスキル向上のための機会を設けています。当初はただ、地区優勝校にみんなで集まり、練習試合を多く重ねていただけでしたが、毎年、その年の中高生ディベーターに何が必要かをTDNで相談し、基本的に練習試合をすることをベースに、内容を変化させてきました。

実はディベート甲子園の“舞台裏”を知れば、同じ地区の代表校は、同じ予選リーグに入ることがないことがわかります。すると、地区予選前まではライバルだった代表校同士は、利害関係のない“地区の仲間”になります。まさに“昨日の敵は今日の友”なのです。そこで、手持ちの議論は包み隠さず出させて、お互いに叩き合い、全国大会までの残り期間（1週間ほど）でバージョンをより上げて全国に臨む、という流れを作っています。特に福島県立会津高校が優勝した2006年は、

道州制論題に関するところある内容を細かい部分まで能代高校と深く検討していた成果が、決勝戦のスピーチにも表れていました。

なお、複数の代表校が予選リーグを突破すれば決勝トーナメントで対戦する場合もあり、そうすると利害関係がゼロではないので議論をオープンにはしたくない、という考えを持つ人がいるかもしれません。しかしながら、複数の学校が決勝トーナメントに勝ち上がることで、喜ばしいことなのです。仮に決勝トーナメントで同地区対戦があったとしても、公平性の観点からジャッジは他の地区の方に割り振られる決まりになっていますので、そのジャッジの方に自分たちの主張が伝えられるか否かで、正々堂々と“恨みっこなし”で対戦をすればいいのです（ちなみに東北学院中学校も、決勝トーナメントで会津若松第二中と対戦し、負けた経験があります！）

6. 指導者研修会

ディベート甲子園OBOG会・東北支部の力を借りて、毎年3月に、指導者対象の研修会を開催しております。指導者に特化した研修会であるため、NADEの大会に出場していない学校の先生方も、比較的参加して下さります。私個人としては、学校現場でのディベートの普及のためには、もっと教員を指導者に育てる研修会、及び指導者同士の交流が図れる研修会が必要だと思っており、更なる工夫を施したいと考えています。なお2011年の指導者研修会は、東日本大震災のために中止となりました。

7. まとめと、今後

「全国で勝ちたい」からスタートした取り組みは現在「有意義なディベートを、地方の隅々に至るみんなで取り組んでもらいたい」に変化しています。指導する側が持つ「ディベートが楽しい」という思いが中高生に伝わっているようで、卒業までディベートに取り組んでもらえています。

一方で現在、最も遅れているのは「ジャッジの育成」です。指導者を指導できるスキルのある人が、東北地方には更に少ない現在、『オンラインディベート』を活用することで、地方に住んでいてもジャッジとしての指導を受け、経験を積むことができるシステムを考えています。

長くなりましたが、特にディベートの普及など、ディベートへの取り組みを考えている方にとって、何かしらの参考になっていれば幸いです。最後までお読み下さり、ありがとうございました。